



体育会

ピョンチャンの話題も、日本選手のメダル獲得で徐々に高まってきた印象である。また、今日のニュースは、小5と中2で実施している全国体力調査で、女子の結果が過去最高になったことを報じている。

そんななか、次のような記事があった。引用してみよう。(朝日DIGITAL、2月10日)

*

体育会的な空気、イエスマン育てる危険性 為末 大さん

「上意下達」「個人より組織が優先」「気合と根性」を大切にす、いわゆる体育会的な空気が、社会と合っていた時代があったと思います。終身雇用の組織は組織も個人も守るけど、ともすれば仲間を守り切ることが何より優先されるムラ的な世界です。

日本のスポーツは、ある意味の社会人養成機関でした。だから、体育会はよかれと思って、ものすごく機能した時代がありました。

でもいまは、パワハラに繊細になり、イノベーションや自立が必要と言われている。「なぜ、悪者扱いされているんだろう」と、運動部出身の方たちが一番、世の中の流れに戸惑いを覚えているのかもしれない。

私自身は、中学校の陸上部の顧問が、運動物理の本をみながら理論を裏付けにした練習をさせるような特殊なルートを歩んできました。いわゆる体育会的な発想とは無縁でした。陸上は比較的、「速い人が偉い」とはっきりしていますが、チーム競技は監督がメンバーを選考することもあって、体育会的な文化は色濃く残っている感じがします。

大学生だけでなく、中学や高校で運動部で活動をする人も多く、スポーツ界の責任は重い。日本

の社会を導くくらいの影響を与えてきた存在でもあり、もっと誇りを持っていいのではないのでしょうか。

普遍的にスポーツから得られるものとして、つらい体験を経て成長する部分ははずせません。つらい体験をさせない方向に流れると、ある意味で残酷な人生を歩ませてしまう。スポーツ以外の世界に持ち越せる大きなものが、敗北体験や、何かを継続することの大事さを学べる点です。

競技をしていると、一度は必ず天才と争い、頑張ってもうまくいかないときがあります。でも、続けるしかありません。スポーツ選手と話していると、相手から何ともいえないメンタルタフネスを奥に感じるがあります。

一方で、選手に考えさせない指導はなくすべきです。選手が若いときは、大人が「黙ってこれをやれ」という方が、高いレベルに達することがある。でも、スポーツはいざというとき、一人でも立ち向かえる人間を育てる場でもあります。日本人が不得意と言われているものかもしれませんが、スポーツのプロセスの中で、自分の判断を大事にするトレーニングや仕組みをつくるのが大事です。

体育会的な空気は、間違えてしまうと、ひたすらイエスという人間を育ててしまいます。全体主義の流れが出てきたとき、イエスマンが多いと危ないことは歴史が証明しています。

自分の頭で考え、自分の価値観で「ノー」とも言えるように導くことこそが、体育会の存在意義だと思います。

*

日比谷の部活では、自分たちの頭で考える部分がたくさんあると思うがどうだろう。